

「ミシェル・セール『パラジット』をめぐって－「寄生」から「感染」を見る」

話題提供者：縣由衣子

『パラジット－寄生者の論理』

Michel Serres, *Le Parasite*, Grasset Paris, 1980.

□ 概観

同者と他者、魂と身体、主体と客体といった二項対立あるいは二元論に対する中間項を考える試みは、セールのみならず、他の思想でも試みられているが、セールの思想の特色は、その中間項をある種の状態として捉えるのではなく、ある視点から捉えた時の中間項とした点にある。つまり、ある視点に準拠すれば、ある関係が任意の主体 A であり、客体 B であり、その中間項 C として捉えられるのであるが、この C もまた別の視点から見れば、何らかの関係の主体でありうる。その点においては、当初の任意の主体 A もまた、別の視点から切り取られる関係においては中間項でありうる。それらの動的な「状況」の変化において、二項とその背後に中間項である第三項がどのような働きをなしているのかを捉えようとしているとまずは考える。

中でも『パラジット』の試みは、多重かつ多元的なシステム（特に複数の人間集団が形成するシステム）を考察する上で、主体と客体という二元論を前提に、それを宿主、寄生者そして妨害者という三者の関係の因子によって読み替えるものだと考えられる。宿主とそこに寄生する寄生者、さらにその関係そのものに寄生する妨害者の関係、そしてシステムの成員が視点によってそのそれぞれの立場に成り代わることによって、システムの複雑化や権力関係の発生を読み解くことが試みられていると言える。

□ 『パラジット』成立の背景：

1960 年代～1970 年代のミシェル・セール(1930-2019)の思想はライブニッツ研究に端を発し科学史・科学哲学の思想的な伝統の中から、これらの問題系に対する論考を Minuit 社から発表していたが、1980 年代になると、その発表の場をより文学寄りの Grasset 社や Pommier 社に移すようになる。それに伴い、思想の著述形式が独自のエッセー形式のものへと変化する。

1980 年代のセールの思想は、『パラジット』、『ローマ』（1983 年、ギリシャ偏重主義的な哲学の伝統に対しローマ主義を再考するもの）、『五感』（1985 年、感

覚を通して「混合」という概念を提示するもの『自然契約』（社会契約論を自然との契約として再考するもの）などより領域にとらわれないものとなっていくが、その中には、1960 年代に提示された初期の思想のモチーフが様々な形で変奏されるように角度を変えて反復されて言及されることになる。

□ ラ・フォンテーヌの寓話：

都会のネズミと田舎のネズミ  
都会のネズミが、ある時、  
たいへん鄭重に、田舎のネズミを招いて、ホオジロの骨つきをごちそうした。  
トルコふうの敷物の上に食器がならべられた。  
ふたりの友だちが味わった歓楽は、ご想像にまかせよう。  
料理は相当のものだった。  
宴会には欠けたところはなかった。  
だが、ふたりがぱくついているときに、誰かが愉しみを妨げた。

食堂の入り口に  
2 人は物音を聞いた。

都会のネズミが逃げだすと、友だちはあとを追う。  
物音はやみ、人は行ってしまった。  
すぐにネズミたちは出てきた。そして都会のネズミは言った。  
「さあ、肉を食べてしまおう。」  
「もうたくさん」と田舎のネズミは言った。  
「あしたはわたしのうちへいらしてください。あなたのように、王さまのごちそうを自慢できるわけではありませんが、邪魔しにくるものはありませんし、わたしはゆっくりと食べるのです。では、さよなら。心配で味がなくなる楽しみなんてごめんです。」

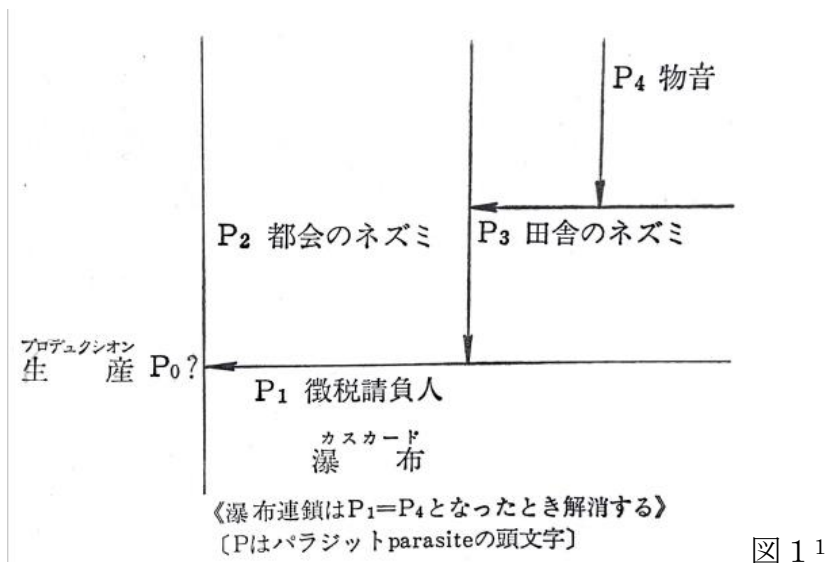
（ラ・フォンテーヌ『寓話』、岩波文庫、今野一雄訳）

□ 「寄食」関係の基本モデルの図解：

最初に生産 production があり、生産に「寄食者 parasite」が引き寄せられて

寄食する。

ラ・フォンテーヌの寓話に沿って考えると、農夫による生産がまずあり、それに引き寄せられた徴税請負人（寓話の中での都会のネズミの宿主）がそこに対して「寄食」関係を持つ。そして、この徴税請負人の家に、都会のネズミが引き寄せられて「寄食」する。その時、徴税請負人は、生産者にとっては寄食者であったものが、都会のネズミの宿主 *hôte* となる。この都会のネズミに引き寄せられて、田舎のネズミがその寄食者となるのだが、この田舎のネズミに妨害音が寄食する、となる。



この原点が生産となっている寄食関係をセールは「矢印が不可逆な、戻ることのない一方向を示す」ものであり、「方向の逆転なき関係」(P.,p.12)を寄食性と呼ぶ、としている。

とはいえ、この図解には補足が必要である。寄食関係という名の下に様々なフェーズがいっしょくたにされているからだ。徴税請負人は、生産者に対する政治的寄食者であり、都会のネズミは徴税請負人の生物学的寄食者であり、田舎のネズミは都会のネズミの人類学的寄食者であり、物音は田舎のネズミの物理的、情報科学的寄食者<sup>2</sup>である。これらが寄食関係という関係のもとにセールによって取りまとめられる。

<sup>1</sup> Michel Serres, *Le Parasite*, Grasset Paris, 1980. p.10.

<sup>2</sup> フランス語の *parasite* には分野によって様々な意味は付与されており、一般的には「食客、寄食者」、生物学的には「寄生生物」である。そして、物理学、通信用語においては、「妨害波、雑音、ノイズ」の意味を持つ。

□ 寄食関係：

端的にいうと、寄食というものは関係自体に関係を持つことを指す。そして、寄食者は生産されるハードなものをソフトなものへと変換していくやり方でその関係に関係する。

□ 寄食の語源の変遷：

語源的には *parasite* とは、習慣や慣習に起源するもので、見知らぬもの、居候に対する一方的な歓待を意味する。転じて、生物学的にある生き物を宿主としてその内部に恒久的あるいは準恒久的に生息する生物を指すようになった。セールはこの宿主の内部で一方的に利益を享受する関係に着目し、この関係性そのものをさらに（哲学的に）拡張する。つまり、宿主に対する一方向的な利益享受関係を結ぶという寄食という関係性である。つまり、寄食者は宿主を食い尽くす（餌食とする）のではない。宿主が一方的に提供するものを寄食者が享受し続ける一方向的な関係（とその連鎖）をセールは主題として取り上げようとしている。

□ システムの中の寄食関係：

セールはこの寄食関係をシステムの中に読み込もうとする。セールにおけるシステムは存在と関係から成り立つ。あるいはそれは点と線の関係に読み替えられる。存在と存在を結ぶ線、つまり関係は、情報が行き来するコミュニケーションと言い換えることができる。そこで、セールの思想の重要なポイントはその関係を走る「流れの遮断やアクシデント、つまり流れの変化や変形」をも含めてこのシステムにおける存在と関係を思考しようとしている点にある。その点において、存在と存在の間を「通過していくものはメッセージのはずなのだが、*parasite*（食客/寄生物/妨害音）はそのメッセージの聴取を妨げ、時にはその発信すら妨げる」（P.,p.19）としている。

ソフト的なもの、すなわち情報やメッセージのみならず、貨幣や物の流通においても、このような妨害者による循環の遮断や失敗は当然のことながら発生する。セールはそれが「病的なもの」や「余計に付け加えられたもの」ではないとする。「寄生体のないシステムはない。この不変項の存在は一つの法則である」（P.,p.21）。セールはむしろ寄生体がシステムそのものなのではないかとすら述べている。

では、いかにして寄生体が発生するのか。ここでセールが指摘するのは、一つのシステムが「調和として記述される」ということであって、調和のなく、作動しないシステムについては記述されないわけであって、システムについての思考がなされる以上、それは常に一つの調和を志向するものとして考えられるということである。しかし、それと同時に現実的には完璧に作動するシステムは「一つとしてない」とセールは述べる。システムには常に漏洩や、損耗、摩滅、誤り、アクシデントや不透明さが付随している。「それはうまく作動しないからこそ作動している」(P.,p.22)。

□ 合理主義的システムイメージへの批判：

セールがライブニッツに対して行う批判の最も代表的なものは、彼が予定調和的な雑音や混乱を含まないシステムを想定していたという点にある<sup>3</sup>。しかし、セールによれば、「ずれ (*écart*) は物そのものに付随する物であり、おそらくはずれがものをうみだすのである…初めに雑音ありきである」(P.,p.22)。

□ 寄食者の論理：

そこで、このセールにおける寄食という概念をめぐるシステムにおける関係の問題について、もう一つの重要な論点を取り上げられる。それは、セールがこのシステムにおける妨害物、あるいはずれ、雑音、あるいは寄生生物をある種の存在者と見做している点にある。セールは常に誰が宿主で誰が寄食者なのかを繰り返し問う。それはつまり、これらが誰かは常に状況によって変化することを示している。妨害物がある種の存在者、項として捉えられるからこそ、状況と視点の変化に応じての立場の移動が生じることが可能になるのである。田舎のネズミにとっては都会のネズミが宿主であり、二匹のネズミにとっては徴税請負人がそうであり、調整請負人にとっては納税者が宿主である。「宿主は先行するものであり寄食者はその後続く…他人を食い物にするシステム」

□ 妨害音は秩序を壊し新しい秩序を作る：

ネズミたちの宴会が物音によってご破算になった例を出しながら、セールは

---

<sup>3</sup> ここで論じられている問題については『ヘルメス』第4巻『分布』の「暗騒音」に詳しく論じられている(Michel Serres, *Hermès IV La Distribution*, Minuit, Paris, 1977, pp.257-272)。

妨害物がシステムを崩壊させ、システムを動揺させ、システムの再構築を要請するのだが、それは元のシステムへの回帰にはならないと指摘する。「物音は新しいシステムを生じさせ、単純連鎖よりもさらに複雑な秩序を生じさせるということである。この妨害音は最初は妨害をしているように見えるが新たな目で見るとシステムを強化している」(P.,p.24)。つまり、エラーやシステムの不全はシステムの新たな、より複雑な秩序を要請する。免疫や耐性を備えたより複雑なシステムである。この時、セールが問題視するのは、物音に慣れて宴会を続行しようとする免疫を備えた都会のネズミに対して、妨害された経験を持たず、複雑さを許容してシステムを強化していくことを理解できず、システムを切断してしまう田舎のネズミである。セールはこの田舎のネズミを「古い意味での合理論者」としている。

□ 田舎ネズミの論理：

ここで、セールは主体と客体の二元論で語ることの膠着性に批判を加える。フランス語においては *hôte* という語には招待主と招待客の意味が同時に持たされている。セールが、主体と客体の二元論の限界を指摘するのは、それがある集団の全体についての説明を与える契機を持たないからである。主体と客体は同格であり、膠着していて、そこに何かしらの不均衡を生じさせるものがなければ、この主体と客体の対立関係が含み込まれる集団のシステムについての説明が不可能である点で、セールは、主体と客体についてのみ思考することを批判し、そこに何かしらの不均衡を与えるズレとしての第三者の存在を要請する。それが、寄食者である。

□ 交換可能性：

主体と客体の二元論から脱するとき、セールは、寄食の連鎖関係をもう一度再構築する。つまり主体と客体の二項関係ではなく、関係は三項によって成り立っていて、それらはこのような連鎖的な関係性を成している (図2)。

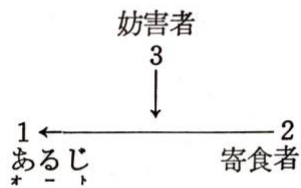


図 2<sup>4</sup>

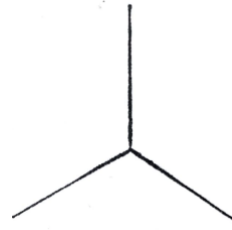


図 3<sup>5</sup>

そして、これらは連鎖的な関係を成すのではあるが、どの項目も絶対的なものではない。つまり、システムの中の誰かはこの連鎖関係の中のどこかの立場に絶対的に位置付けられるというわけではないのであって、その意味でセールは「三つの位置はここにあっては等価である。各自が他の誰かと一直線状に位置するのであり、誰も他の二者に対して第三者 *tiers* の立場に立ちうるのである」(P.p.32)とする(図3)。セールが寄食関係を人間関係のATOMと述べているのはおよそこのような所以による。つまり、人間集団のシステムを想定するとき、(その存在者は必ずしも人間だけに限定されない)セールはそのシステム内の関係の因子となるものをこのような流動的な三者関係に求めるのである。

主体と客体にとどまらず、二項対立的な二元論は、結局一方を他方の写鏡とするに過ぎないとセールはしている。第三者は探すべきものとしても考えられる。そしてそれがどのようにシステムを乱し、複雑化させるかについて考える必要があるとセールは指摘する。

*para-*という接頭辞が示しているのは「脇に、そばに」を意味する。そのような隔たりあるいはズレ *écart* をシステムに読み込むことが試みられる。

□ ハードからソフトへの変換：

生産がこの寄食関係の原点0に置かれていたことに再び戻って考えると、寄食者はある種の交換関係を宿主に対して持ち出すとセールは指摘する。それはハードなものとのソフトなものとの交換である<sup>6</sup>。生産者に対して寄食者は貨幣を支払う。貨幣は食べること(直接的)ができない、ソフトで間接的なものである。

<sup>4</sup> *Le Parasite, op.cit., p.31.*

<sup>5</sup> *Ibid., p.32.*

<sup>6</sup> ここで論じられている問題については、『五感』の「ボックス」においてより詳しく論じられている(Michel Serres, *Les cinq sens*, Grasset, Paris, 1985, pp.118-124)。

「食客は新しいものを発明する。なぜなら彼は皆と同じようには食べないからだ。彼は新しい論理を構築する。彼は交叉させ交叉交換を行う。彼は物々交換をせず、通貨を変えてしまう」(P.,p.50)

寄食関係において、寄食するものは、宿主の所有するハードなものをソフトなものへと変換して交換を行う。ハードなものに対してソフトなものがより多く含まれるものが連鎖の瀑布の途上で交換されていくことになる。システムを最も左右するものは、最も生産する者ではなく、それに寄生する間接的でソフトなもの、つまり最も多くの情報を有するものなのである。労働に対する対価が命令という情報で支払われると言ったように、時にはそのソフトなものは関係自体に関係すること、つまり地位というソフトな情報で支払われる。生産されるハードなものほど単純であり、寄食者が有するソフトなものほど間接的で関係に関係する複雑化されたものである、とセールはしている。

#### □ 補論：ローマにおける戦争と疫病 *peste*

「疫病状態及び戦争状態という二つの状態は次のように区別される。戦争においては、諸要素が全体のうちに秩序づけられ、しかもそれら諸要素が局所的に比較可能である。つまり戦争は均質状態である。階級闘争…階級同士は闘争状態にあり、戦いが諸階級を作り出す。秩序 *ordre* は常に戦争の中で戦争によって生じる。戦争は分類を生み出し、全てを単調にする。どのように平民階級は形成されたのか、と人は問う。答えは単純にして明快である。平民は自らにとっても、敵対者にとっても、歴史家にとっても平民として姿を現す。平民は闘争によって、貴族との戦争によって、階級あるいは身分 *ordre* として構成されていくのであり、戦いが少しずつ平民階級をうみ、形作り、組織し、規定していくのである。ローマそれ自体もエクアエシ人やヘルニキ人と絶えまなく戦争し続けることなしに統一を維持できない。ローマという都市は平和時には都市としてのまとまりを失ってしまう。戦時には全体秩序があり、平和時には個と個同士の単調さがある。…戦争は雑然たる多様体を一つの概念的統一体の元に包摂する。」<sup>7</sup>

「疫病 *peste* 状態においては誰が感染者か誰にもわからないし、誰が感染者であり感染者でないか、誰が保菌者で誰が感染源か誰にも判定できない。…戦争は識別を強化するが、疫病はそれを破壊する。…疫病は、全体において個別的に個体を奪い取る。冒されるのは諸関係である。すなわち集団の中で個人を個人たら

---

<sup>7</sup> Michel Serres, *Rome*, Grasset, Paris, 1983, p.201.



しめている識別の基準及び手段の全体である。酩酊はモナドを眠り込ませるが、疫病は関係の網目を溶かす。従って疫病の方が酩酊よりも基礎的である。」<sup>8</sup>

「戦争状態は極限 *limite* 状態であり、疫病状態は可能 *possible* 状態である。可能状態であるということはそこにおいては社会的紐帯が識別不可能になるからであり、個人がそれぞれ多数の値を取るようになるからである。集団がジョーカーだらけになる。…戦争は標準状態であり、疫病は非標準 *non standard* 状態である。全てが規格化されている状態と何も規格化されていない状態。基礎的 *fondamental* なのは非標準状態である。非標準状態は、認識論的観点からも基礎的であり、人間集団にとっても基礎的であり、歴史の時間にとっても基礎的である」<sup>9</sup>

---

<sup>8</sup> *Ibid.*, p.202.

<sup>9</sup> *Ibid.*, p.204.